

叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (X) —

茂木 秀 淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉¹

[203章] (=D.210章, 7641-7688)

ユディシュティラは言った。

- (1) 父よ、バラタ族よ、解脱のための最高のヨーガを私に語るべし。それを私は正しく知りたい。語るべし、すぐれた方よ。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも人々はこの古譚を例として語る。弟子と師匠の解脱に関する対話を。
 (3) すぐれた聖仙であり師匠であるバラモンが座っていると、すぐれた英知をもち善を求める意欲ある一人の弟子が、(師匠の) 両足に触れ、立ち上がって合掌して言った²。
 (4) もしあなたが私の敬礼に満足したならば、尊者よ、私のもっているある大きな疑問について解説されたし³。
 (5) 私はどこから生じ、あなたはどこから生じたのか。その究極を (param) 正しく語るべし。また、あらゆる生き物が等しい時、適切に生じるはずの死と誕生はどうして (等しさと) 反対の仕方であるのか⁴(?)。
 (6) そしてまたもろもろのヴェーダに説かれた文章、そして世間的に広まった文章⁵、この一切を正しく、知者よ、説明されたし。

師匠は言った。

- (7) 弟子よ、大きな英知をもつ者よ、この最高のブラフマンの秘密について、あらゆる生き物⁶と伝承聖典の本質⁷である大我 (adhyātma) について聞くべし。
 (8) ヴァスデーヴァの息子 (クリシュナ) はこの世の一切であり⁸、あらゆるヴェーダの

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究(IX)—』(信州大学教育学部研究紀要第89号1996年12月)に続くものである。略号などは前稿に準ずる。

2 P.は三行詩。D.は第2詩節の cd 句として、師匠の属性を詳説する次の句を挿入し二つの二行詩となっている。

tejorāśiṃ mahātmānaṃ satyasandhaṃ jitendriyam /

3 D.はP.の第五詩節の ab をこの後に加え、三行詩としている。P.は第四詩節が二行詩、第五詩節が三行詩、D.はその逆である。

4 nivartante N. nivartante nitarāṃ vartante

5 laukikaṃ vyāpakaṃ N. laukikaṃ smṛtivākyaṃ tādṛśaṃ vyāpakaṃ sarvavarṇāśramasādhāraṇaṃ

6 P. sarvabhūtānām D. sarvavidyānām

7 vasu Arjunamīśra : vasu sārabhūtaṃ dhanam iva

8 P. sarvam idaṃ D. param idaṃ

口である。彼は、真実であり、布施であり⁹、祭式であり、そして忍耐であり抑制であり誠実である。

- (9) ヴェーダを知る者たちは彼をプルシャ、永遠のヴィシュヌ、創造帰滅を司る者¹⁰、未顕現の者、永遠なるブラフマンとして語る。このブラフマンはヴリシュニの後裔である¹¹。その話を聞くべし¹²。
- (10) パラモンはパラモンによって学ぶべきであり、王族はクシャトリアによって（学ぶべきである）¹³。神々の神であり計り知れない熱力をもつヴィシュヌの偉大さを汝は聞くに値する者である、善き者よ¹⁴。最高者たるヴリシュニの話を聞くべし。
- (11) （それは）始まりも終わりもなく、有と無とを自相とする三界の時の輪であり、あらゆる生き物の中で¹⁵、車輪のごとく廻るのである。
- (12) 不滅にして未顕現、不死にして永遠のブラフマンのことを、（人々は）人中の虎¹⁶、長い鬚をもつ者、人中の雄牛と言っている¹⁷。
- (13) 最高にして不変なる者は、祖霊・神々・聖仙、そしてまたヤクシャとダーナヴァ¹⁸、ナーガとアスラと人間を創造した。
- (14) 威光ある者は¹⁹、（世界の）帰滅の時に根本原質を獲得し²⁰、ユガの始まる時に、もろもろのヴェーダ聖典と永遠の世間の規範（lokadharma）を創造したのである。
- (15) 季節に従って²¹、季節の特徴である種々の姿は変化するのが見られる。それと同様に、（上述の）これらはそれぞれブラフマンの昼と夜において²²（変化するのである）。（cf. Manu 1.30）
- (16) また、ユガの始まりにおいて、時間と結びつくことによって存在する²³それぞれの知識は、世間的行為の規範から生じたものである。
- (17) 偉大な聖仙たちは、自存なる者に承認され、ユガの終わりに潜れた²⁴もろもろのヴェーダを古譚と共に、熱力（tapas）によって最初に獲得したのである。

9 P. dānam D. jñānam

10 P. sargapralayakartāram D. svargapralayakartāram

11 vārṣṇeyam N. vārṣṇeyam vṛṣṇīṣu kṛtāvātāram

12 P. は三行詩、従って D. とは一行ずつずれる。

13 D. はこの句の後に次の句を挿入し、D.12ab としている。P. は三行詩であり、従って P.10ab=D.11cd, P.10cd=D.12cd, P.10ef=D.13ab というように対応する。

vaiśyo vaiśyais tathā śrāvyaḥ śūdraḥ śūdrair mahātmanāḥ /

14 P. kalyāṇa D. kalyāṇam

15 P. sarvabhūteṣu D. sarvabhūteṣe

16 P. puruṣavyāghraṃ D. puruṣavyāghra

17 この詩節で P. と D. の cd 句が一致する。

18 P. yakṣadānavān D. yakṣarākṣasān

19 P. prabhūḥ D. punaḥ

20 P. pralaye prakṛtiṃ prāpya D. pralayaṃ prakṛtiṃ prāpya

21 P. yathārtuṣv D. yathartāv

22 P. tathā brahmāharātriṣu D. tathā bhāvā yugādiṣu

23 P. bhāvi D. bhāti

24 P. 'ntarhitān D. tarhi tān

- (18) ヴェーダを知る聖なるブリハस्पティはヴェーダ支分を知った。(cf.Hopkins, Great Epic of India, p.11) そしてブリダの息子(シュクラ)は世間の幸福のために処世の聖典を²⁵語った。
- (19) ナーラダはガンダルヴァの知(音楽)を, パラドヴァーシャは弓術を, ガールギヤは神仙の行為を, クリシュナートレヤは医術を(語った)。
- (20) 論理の聖典は数多くそれぞれの論者によって語られた。議論・伝承・善行として(hetvāgamasadācāir) 語られた典籍は敬われている²⁶。
- (21) 無始にして最高の²⁷ブラフマンを神々も聖仙たちも知らなかった。唯一聖なる維持者, 威光あるナーラーヤナがそれを知ったのである。
- (22) ナーラーヤナから, 聖仙の群れ, 主な神々とアスラ, 古の王仙, そして苦の最高の治療(が生じたのである)。
- (23) 根本原質はプルシャに支配された状態を²⁸常に²⁹生み出す。するとすべての³⁰世界は, 原因と結びついて, 開展するのである(parivartate)。
- (24) 一つの炎から他の炎が何千となく生じるように, 唯一の根本原質は(存在物を)創造し³¹, 無限性の故に(ānāntyān) 自ら減少することはない。
- (25) 未顕現のものによって生じた理性が³²自我意識(ahaṃkāra)を生み出すのである。そしてまた自我意識から虚空が生じ, 虚空から風が生じるのである。
- (26) 風から火が, それから水が, 水から地が生じるのである。根本の原因(mūlaprakṛtayo) はこれら八種である³³。世界は(jagat 生き物?) これらの上に存在しているのである。
- (27) さらに知覚器官は五種であり, 行為器官も五種である。外的対象も五種あり, そして, 変異したものの中に(vikāre), 第十六番目としてマナスが一種存在する。
- (28) 耳・皮膚・目・舌・鼻が五種の(知覚) 感官であり³⁴, 両足・肛門・性器・両手・発声器官(vāk) が行為の³⁵ (器官である)。
- (29) 音声, 接触³⁶, 色, 味, そして香り(が対象)である。これらに行き渡る心は(vyāpakaṃcittaṃ) 遍在するマナスであると理解すべし。
- (30) 味の認識においてはこの舌が, 同様に³⁷話すことにおいては(vyāhṛte) 発声器官が(働

25 P. nitiśāstraṃ ca D. nitiśāstraṃ tu

26 P. upāsate D. upāsyatām

27 P. yat paraṃ D. tat paraṃ

28 P. puruṣādhiṣṭhitam bhāvaṃ D. puruṣādhiṣṭhitān bhāvān

29 P. sadā D. yadā

30 P. sarvaṃ D. pūrvaṃ

31 P. sṛjate D. sūyate

32 P. avyaktakarmajā buddhir D. avyaktāt karmajā buddhir Arjunamiśra: avyaktakarmajā prakṛtikṣobhajā

33 P. 'ṣṭau tā D. hy aṣṭau

34 P. pañcendriyāṇy apī D. pañcendriyāṇy atha

35 P. karmaṇām apī D. karmaṇi apī

36 P. sparśo 'tha D. sparśaś ca

37 P. tathaiva ca D. tathocyate

- くのである)。マナスは種々の感官と結びついてあらゆるものに広がるのである³⁸。
- (31) これら十六の神々は、個別に、体の中に存在する³⁹認識を司る者 (jñānakartāram) に仕えている、と知るべし。
- (32) 同様に、味覚は水の性質⁴⁰であり、香りは地の性質である。聴覚は音声の性質であり⁴¹、目は火の性質である。触感は風の性質であると、常にあらゆる生き物において知るべし。
- (33) マナスはサットヴァの性質である⁴²と言われる。そしてサットヴァは未顕現のものから生じたのである。従って、理性ある人は、(マナスは) あらゆる生き物の本質となって存在していると⁴³認識すべし。
- (34) これらもろもろの状態が (bhāvā) 動くもの動かぬものからなる一切の世界を支えるのである (vahanti)。それらは、最高の境地と⁴⁴人々が言った汚れなき神に⁴⁵依存しているのである。
- (35) 大きなアートマンは、これらの状態を伴う九つの門をもつ神聖な町に (puram) 行き渡って横たわる (śete)。この故プルシャと言われるのである。
- (36) それは、不老不死にして、顕現・未顕現と教示され⁴⁶、遍在し、属性をもち (saguṇa)、微細にして、あらゆる生き物の性質 (guṇa) の拠り所である。
- (37) 灯火は小さくとも大きくとも照明を本質とするように、プルシャはあらゆる生き物において認識を本質とする者と知るべし。
- (38) 彼は認識の対象を認識する⁴⁷。聞くのは彼であり、見るのは彼である。体はその (認識の) 原因である⁴⁸。彼があらゆる行為の行為者である。
- (39) 木の中にある火は、木が切られると知覚されない。同様に、身体にあるアートマンは ヨーガによってのみここで⁴⁹知覚されるのである⁵⁰。
- (40) 水は川と結びついて流れ、光は太陽と結びついて進行するように⁵¹、身体は身体をも

38 P. vyastaṃ D. vyaktaṃ

39 upāsinam N. upāsinam arthāt parātmānaṃ

40 somaguṇā Arjunamiśra : somaguṇā jalamayi

41 P. śabdaguṇaṃ D. nabhoguṇaṃ

42 sattvaguṇaṃ N. sattvaguṇaṃ sattvakāryam

43 sarvabhūtātmarshātasthaṃ N. sarvabhūtānām ātmabhūta īśvaras tatstham upādhitvena tatra sthitaṃ sarvāntaraṃ gaṃ sattvaṃ jāniyam

44 P. paramaṃ padam D. prakṛteḥ param

45 virajasam devaṃ N. virajasam sarvapravṛttiśūnyaṃ kūṣastham

46 vyaktāvyaktopadeśavān N. vyaktaṃ mūrtaṃ avyaktaṃ amūrtaṃ tadubhayātmanā upadiśyate vede 'dve vā brahmaṇo rūpe mūrtaṃ caivāmūrtaṃ ca' ityādinā yaḥ sa vyaktāvyakopadeśaḥ kāryakāraṇātmā tadvān tadadhiṣṭhānabhūto neti neti yāgamaviśayaḥ

47 P. so 'tra vedayate vedyam D. śrotraṃ vedayate vedyam

48 kāraṇaṃ tasya deho 'yaṃ N. ayaṃ dehas tu tasya śabdādivedanasya kāraṇaṃ nimittaṃ na tu vettā kiṃ tu sa eva kartā

49 atra 「身体において」か「この世界で」か。

50 D.はこの後に次の詩節を挿入している。

agnir yathā hy upāyena mathitvā dāru dṛśyate /

tathaiivātmā śarīrastho yogenaivātra dṛśyate /

51 P. santanvānā yathā yānti D. santatatvād yathā yānti

つ者 (śaririn) と (結びついて進むのである)。

- (41) 睡眠と結びつくと、アートマンは五感を伴って⁵²身体を離れて進むように、ここでも (死に際して?) 同様なことが知覚されるのである。(cf. Johnston, Early Sāṃkhya, p. 11.)
- (42) (アートマンは) 以前 (の身体) を行為によって満たし、行為によって (新たに) 生じるのである⁵³。(アートマンは) 自ら為した大きな力をもつ行為によって他のところに導かれるのである。
- (43) 彼は身体を捨ててその身体から別の身体を獲得するのである。自らの行為によって生じた彼の生き物の群れについても同様に説明するであろう。

[204章] (=D.211章, 7689-7706)

師匠は言った⁵⁴。

- (1) 四種の生き物は、動くものも動かぬものも、未顕現のものより生じ、未顕現のものに帰滅すると言われている。未顕現のものの本質を本質とするマナスは未顕現のものに帰滅する⁵⁵と知るべし。
- (2) いじちくの木の種の中にあつた大きな幹が生じるのが見られるように、顕現したものは未顕現のものより⁵⁶生じるのである。
- (3) 鉄片は磁石に近づくが、両者は意識あるものではない⁵⁷。自らの性質を原因として生じたもろもろの状態は、他の同種のものに (近づくのである)⁵⁸。
- (4) 同様に、未顕現のものから生じた状態は、行為する者の原因という特徴をもち (kāraṇalakṣaṇāḥ), (それ自体) 意識はないが、意識ある者の (cetayitṛ) 原因と結びついているのである⁵⁹。
- (5) (かつては) 地もなく、虚空もなく、天空もなく⁶⁰、生き物もなく、聖仙もなく、神も悪魔もなかった。靈魂 (jīvam) 以外には他の何ものもなかった。またそれらが集合して⁶¹存在することもなかった。
- (6) すべての行為として(?)⁶²、すべてに存在し、マナスを原因とし、特徴を伴い⁶³、無知

52 P. pañcendriyasamāgataḥ D. pañcendriyasamāyutaḥ

53 P. karmaṇā vyāpyate pūrvaṃ karmaṇā copapadyte D. karmaṇā bādhyate rūpaṃ karmaṇā copalabhyate Arjunamiśra: vyāpyate pūrvadehaṃ tyājayate / upapadyate dehāntaraṃ niyate

54 P. gurur uvāca D. bhīṣma uvāca

55 P. avyaktanidhanaṃ D. avyaktalakṣaṇaṃ

56 avyaktāt N. avyaktān manasaḥ

57 P. niścetanāv ubhau D. niścetaṇaṃ yathā

58 svabhāvahetuḥ bhāvā yadvad anyad apīdṛṣam N. svabhāvaḥ pūrvasaṃskāro hetur yeṣāṃ karmaṇāṃ tājā dharmādharmaḥ bhāvā arthā abhidravanti yac cānyad api idṛṣam avidyādikaṃ tad apy abhidravati

59 P. abhisamhitāḥ D. abhisamphatāḥ

60 P. na bhūḥ khaṃ dyaur na D. na bhūr khaṃ dyaur

61 P. samhitam D. samphatam

62 P. sarvanityā D. pūrvaṃ nityaṃ

63 P. manohetu salakṣaṇam D. manohetum alakṣaṇam

の行為をもつ(?)⁶⁴, とこのように原因の特徴⁶⁵は教示されている。

- (7) それは⁶⁶, もろもろの原因と⁶⁷結びついて, 結果の集合を作るのである。その集合によって⁶⁸, この始まりも終わりもない大きな輪は廻るのである。
- (8) 未顕現のものを中心とし, 顕現したものを輻とし, 変異したものを車輪として⁶⁹, なめらかな車軸をもつ輪は, 知田者に支配されて, 永遠に廻るのである。
- (9) (車軸の) なめらかさの故に, ゴマすり機によってゴマをするように, この世界のすべてを, 無知から生じる享樂によって⁷⁰捕えて, この輪の中ですりつぶすのである。
- (10) その輪は⁷¹, 欲望の故に (tarṣāt) 自我意識を得て⁷²行為を行う。それが⁷³結果 (行為) と原因 (質量因) の結合における理由であると示されている。
- (11) 原因は結果を越えることはなく⁷⁴, 同様に結果は原因を (越えることはない)。しかし, もろもろの結果の (生起の) 補助として⁷⁵時間が原因となるのである (? kālo bhavati hetumān)。
- (12) もろもろの物質因と変異物とは, 順次原因 (hetu) と結びつき, 互いに常にプルシャに支配されて存在するのである。
- (13) タマスの状態と離れた⁷⁶ラジャスを伴うもの (sarajas 状態?)⁷⁷は, 原因の力に伴われ, 風に動かされた埃のように, 知田者に従うのである。その状態は⁷⁸それら (タマスの状態) によって⁷⁹触れられることはなく, それら (タマスの状態) は⁸⁰偉大な自己をもつその者 (知田者?) によって⁸¹(触れられることはない)⁸²。
- (14) 彼は, ラジャスをもつ者ともなり, ラジャスなきものともなろう。ちょうど風と同じように⁸³。賢者は田と知田者の⁸⁴相違をこのように知るべし (cf.MBh.XII.187.37)。そして努力 (abhyāsa) と結びつくならば, 彼は再び物質因に赴くことはないであろう。
- (15) 至尊の聖仙はこの生じた疑問を断ち切った。このように完成の特徴からなる境地を観

64 ajñānakarma N. ajñānakarma māyākāryam

65 kāraṇalakṣaṇa Deussen: das Merkmal der [Seele als] Weltursache

66 tat N. taj jīvasvarūpaṃ

67 kāraṇair N. kāraṇair vāsanābhir

68 yena N. yena saṃgrahaṇa

69 vikāraparimaṇḍalam N. vikāro jñānakriyādiḥ parimaṇḍalaṃ nemis

70 bhogaḥ N. bhogaḥ sukhaduḥkhyogaḥ

71 tat N. tat saṃghātātmakaṃ cakraṃ

72 P. ahaṃkāraparigrahaṃ D. ahaṃkāraparigrahāt

73 sa hetuḥ N. sa hetuḥ tatkarmakāraṇam

74 P. nātyeti D. nābhyeti

75 P. kāryāṇaṃ tūpakaraṇe D. kāryavyaktena karaṇe

76 cyutaḥ N. cyutaḥ pūrvadehād vibhraṣṭo jivaḥ

77 P. sarajas D. rājasais

78 P. bhāvo D. bhāvair

79 taiḥ N. taiḥ rajaḥsattvatamojair dehendriyabhūtasūkṣmākhayair bhāvair

80 te N. te bhāvādayo

81 tena N. tena dehinā

82 P.の第13, 14詩節は三行詩となっている。これにD.は二行詩3つが対応している。

83 P. sa vai vāyur yathā bhavet D. naiva vāyur bhaved yathā

84 P. kṣetrakṣetrañāyor D. sattvakṣetrañāyor

察すべし(?)⁸⁵。

- (16) 火に焼かれた種子は再び芽を出すことはないように、アートマンは知識によって焼かれた汚れに再び束縛されることはない⁸⁶。

[205章] (=D.212章, 7707-7741)

師匠は言った⁸⁷。

- (1) 行為を特徴とするこの規範(ダルマ)は正しく獲得された⁸⁸。(ダルマの)認識を根拠とするこれらの人々にとっては、他の原理は望ましいものではない。
- (2) 稀にしかいない(durlabhā)ヴェーダの知識をもつ人々は、ヴェーダの文章に確信をもち、それ故に、ここ(ヴェーダ)で目的として称賛された道を望むのである⁸⁹。
- (3) よき人々によって行われたのであるから、この振舞い(vṛtta)は非難されるものではない、というのがこの認識である。最高の境地に赴く認識はそれとは別である⁹⁰。
- (4) 身体ある者(śarīravān)は、ラジャスとタマスより生じる欲望と怒りなどの状態(bhāva)と結びついて、迷妄の故に、あらゆるものを所有するのである⁹¹。
- (5) それ故、身体が終わるのを⁹²望んでも、不浄なことをなしてはならない。行為の穴⁹³に入るならば、もろもろの清浄な世界を得ることはないであろう。
- (6) 鉄と混じた金は熱しても輝かないのと同様に、熟さない赤い色のごとき認識(apakvakaṣāyākhyam vijñānam)も輝くことはない。
- (7) 愛欲と貪欲に従ってさまよいつつ、迷妄のゆえに⁹⁴、不善(アダルマ)をなす者は、執着をもったまま、正しき道を踏み越え⁹⁵、滅するのである。
- (8) それゆえ、声などの外的対象に執着することなくさまようべし⁹⁶。怒りと喜び、そして悲しみは⁹⁷(対象から)順次生じる⁹⁸のであるから。
- (9) 身体が五元素を本質として、サットヴァ・ラジャス・タマスからなる時、人は何を賞

85 tathā vārtāṃ samikṣeta kṛtalakṣaṇasammitām N. tatheti / kṛtāṃ kriyāyā niṣpāditaṃ yal lakṣaṇaṃ mūrdhābhiṣiktatvādi tena sammitāṃ tad anurodhiniṃ vārtāṃ sukhaduḥkhaṇapṛāptiparihāropāyabhūtāṃ kriyāṃ samikṣeta tadvad ātmānaṃ kriyāviṣṭaṃ kartāram iḥṣeta

86 P. sambadhyate D. sampadyate

87 P. gurur uvāca D. bhīṣma uvāca

88 P. yathāyam upapadyate D. yathā samupalabhyate

89 P. prayojanam atas tv atra mārgam icchanti saṃstutam D. prayojanaṃ mahattvāt tu mārgam icchanti saṃstutam N. prayojanaṃ svargamokṣau tayor madhye saṃstutam praśastaraṃ mokṣamārgam nivṛttirūpaṃ mahattvād icchanti

90 P. anyeyam D. abhyetya

91 P. sarvaparigrahān D. sarvān parigrahān

92 N. dehayāpanaṃ dehasambandhavicchedam aśarīratākhyāṃ mokṣam

93 P. karmaṇo vivaraṃ D. karmaṇā vivaraṃ N. vivaraṃ ātmavividīṣākhyāṃ dvāram

94 P. mohāt D. lobhāt

95 ākramya N. ākramya upamṛdya utkrameti

96 P. asamrāgād anuplavet D. na saṃrāgād ayaṃ vrajet

97 P. krodhahaṛṣau viṣādaś ca D. krodho haṛṣo viṣādaś ca

98 P. jāyante hi D. jāyate ha

賛し、あるいは何に怒るのか。(また)何を語るべきか⁹⁹。

- (10) 愚かな人々は、触感・色・味などに執着し、無知の故に、(それらが)自分に生じた(?)¹⁰⁰地の性質であることを理解しないのである。
- (11) 地でできた家は地によって塗られ(て守られ)るのと同じ様に、地からなるこの身体も地の変化したのものによって塗られ(て守られ)るのである¹⁰¹。
- (12) 蜜・油・乳・バター・肉・塩・砂糖・穀類・果実と根、そして水は地の変化したものである。
- (13) 森に住んで、欲望に従うべからず。苦行のために(śramād)¹⁰²、甘くなくとも身体を維持する¹⁰³食べ物を取るべし。
- (14) 同様に、輪廻の森に住みつつ、努力に専心する者は、歩行のために食事をとるべし。病気のために薬を服用するように。
- (15) 真実・清浄・正直・棄却によって、そして名声¹⁰⁴と勇気によって、忍耐・堅忍によって、理性によって、マナスによって、そしてタパスによって、
- (16) 起きるがままの¹⁰⁵あらゆる状態それぞれと共に住むべし。高揚した心もち、静寂を求め、感官を制御すべし。
- (17) サットヴァ、ラジャス、タマスによって惑乱した人々は、無知のゆえに、ろくろのごとく早く(輪廻の世界を)回転するのである。
- (18) それゆえ、無知より生じたるもろもろの誤りを正しく観察すべし。無知を引き起こす自我意識を常に¹⁰⁶捨てるべし。
- (19) 大元素、感覚器官、そして、サットヴァ・タマス・ラジャスというグナ、(これら)三界の一切は、自在者をふくめ、自我意識に依存している。
- (20) この世界においては、時が、季節の性質を示すように、同様に、存在物においては、自我意識が、存在物を生じさせるものと¹⁰⁷知るべし。
- (21) タマスは、惑乱させ、黒色で無知を引き起こすものと知るべし。三種のグナはすべて、喜びと苦しみに結びついている(ものと知るべし)。それらを、サットヴァの、ラジャスの、そしてタマスのものと知るべし¹⁰⁸。
- (22) 歓喜より生じた当惑¹⁰⁹、喜び、疑念なきこと、堅忍、記憶、これらをサットヴァの性質と知るべし。ラジャスとタマスの性質は次の様に(知るべし)。

99 P. kiṃ vadet D. kiṃ vadan

100 P. avijñānād ātmajaṃ D. vijñānād ātmānaṃ

101 P. mṛdvikārair vilipyate D. mṛdvikārad na naśyati Deussen: ebenso schützt sich dieser aus Erde gebildete Leib vor dem Untergang nur durch erdentstammende Produkte.

102 P. śramād D. grāmyam

103 yāpanam N. yāpanaṃ dehanirvāpakam

104 P. yaśasā D. varcasā

105 P. yathāvṛttān D. upavṛttān

106 P. nityam D. duḥkham

107 P. bhūtapravartakam D. kāmapravartakam

108 P. は三行詩, D. は二行詩. P.21ef=D.22ab

109 P. pramoho harṣajaḥ D. prasādo harṣajā

(23) (それらは) 愛欲と怒り, 醜妬, 貪欲と惑乱, 恐怖, 疲労, 失望と嘆き, 不満, 自惚れと高慢, 野卑 (である)。

(24) これを始めとするもろもろの欠点の軽重を観察して, 自分にある¹¹⁰一つを絶えず吟味すべし。

弟子は言った。

(25) マナスによって捨てられるべきはいかなる欠点か。理性によって和らげられるのは, いかなる (欠点か)。繰り返しやってくるのは, いかなる (欠点か)。迷妄のため (やってくる) 力がないように見えるのは, いかなる (欠点か)

(26) 智者は, 理性を用いて合理的に, いかなる (欠点か) 力があり, いかなる (欠点か) 力がないことを吟味するのか。これらすべてを示すべし。わたしは, ありのままに知るであろう, 力ある者よ¹¹¹。

師匠は言った¹¹²。

(27) 欠点を根元から切って清浄となった自我を持つ者は, 開放されるのである。その者は, 生じた (欠点を) 滅するのである。斧が鉄でできたものを切るように。そして, 自我の完成していない者は¹¹³, 共に生じた¹¹⁴ラジャス的な欠点によって滅するのである。

(28) ラジャス的 (な欠点) とタマス的 (な欠点) は, 清浄な本性を持つ者 (サットヴァ) に行為を引き起こすことはない¹¹⁵。これらすべては, 身体ある者が (身体を得る) 原因である。しかし, 心を制御した者にとっては, (これら) すべては¹¹⁶同等なものである (?)¹¹⁷。

(29) 従って, 心を制御した者が避けるべきはラジャスとタマスである。ラジャスとタマスから開放された人 (サットヴァ) は, 汚れなき状態に至るであろう。

(30) あるいは, 「マントラに従って, 肉を食べることは, 祭式において行なわれる¹¹⁸」と人々は言うであろう。それ (サットヴァ)こそが, (肉を) 獲得しない, そして清浄なダルマを維持する原因である¹¹⁹。

(31) ラジャスによって, ダルマにかなった¹²⁰結果をも人は獲得するであろう¹²¹。また財産と結びついた (結果) を過度に, そしてあらゆる愛欲を行なうこともあろう。

110 P. ātmasaṃsthānām D. ātmasaṃsthānam

111 P. etat sarvaṃ samācākṣva yathā vidyām aham prabho D. eṣa me saṃśayas tāta tan me brūhi pitāmaha

112 P. gurur uvāca D. bhiṣma uvāca

113 P. tathākṛtātmā D. tathā kṛtātmā

114 saḥajair N. saḥajair anādibhiḥ

115 P. śuddhātmākarmasambhavam D. śuddhātmakam akalmaṣam

116 P. sarvaram D. sattvam

117 ātmavataḥ samam N. ātmavato jitacittasya tu sattvaṃ samam brahma tatprāpakam / 'nirdosaḥ hi samam brahma' iti samaśabdasya brahmaṇi prayogāt //ただし, N.は, sarvamではなくて sattvam と読んでいる。

118 P. māṃsādānāṃ yajuskṛtam D. ātmādānāya duṣkṛtam

119 P. hetuḥ sa evānādāne D. sa vai hetur anādāne

120 P. dharmayuktāni D. 'dharmayuktāni

121 P. samāpnuyāt D. samāpnute

- (32) タマスによって、貪欲と結びつき怒りより生じることを人は行ない、殺生と娯楽に満足し、怠惰と睡眠に陥るのである。
- (33) サットヴァに住し、(サットヴァに?) 依拠する者は、サットヴァ的な状態を清浄と見るのである。彼は、身体がある状態で、汚れなく、吉祥にして清浄な、知識を備えた者である¹²²。

[206章] (=D.213章, 7742-7763)

師匠は¹²³言った。

- (1) 迷妄はラジャスとタマスによって生じるのである、人の雄牛よ。そして(この二つから)怒りと貪欲、恐れ、高慢が(生じるのである)。これらの制圧によって¹²⁴清浄が生じるのである。
- (2) (その時人々は)究極の最高我であり、神聖にして不滅不動なる、未顕現に住するすぐれた神であるヴィシュヌに入るのである¹²⁵。
- (3) 彼(ヴィシュヌ)の幻力によって焼かれた手足を持ち¹²⁶、知識を失い、希望なき人々は¹²⁷、知識の迷妄の故に、そこ(迷妄)から愛欲に¹²⁸赴くのである。
- (4) 人々は、愛欲から怒りに達し¹²⁹、そして貪欲と迷妄に(達するのである)。自惚れと高慢から¹³⁰自我意識に、そして自我意識からもろもろの行為に(達するのである)。
- (5) もろもろの行為と愛情が結びつき¹³¹、愛情からすぐに嘆きが(生じる)。楽と苦の開始によって¹³²誕生と死とが準備される¹³³。
- (6) 誕生によって、精液と血によって生じた、大便・小便・水分・血の源(血より生じたもの?)にまみれた¹³⁴胎児となる。
- (7) (胎児は)渴愛によって制圧され、大小便などに束縛され、これらの中で漂うのである。この点に関し、女を輪廻の糸を紡ぐものと知るべし。
- (8) 本性として、それら(女)は地であり、男の特徴は地を知る者である。それゆえ、賢明なる人(男)は、とりわけこれらを無視すべし¹³⁵。
- (9) なぜならば、恐ろしい姿をもつこの者(女)は、魔術によって、知恵なき人々を迷わ

122 P. śuddho vidyāsamanvitaḥ D. śraddhāvidyāsamanvitaḥ

123 P. gurur D. bhīṣma

124 P. sādhanāc D. sādānāc

125 P. viśante D. vidus taṃ

126 P. māyāvidagdhāṅgā D. māyāpinaddhāṅgā

127 P. jñānabhraṣṭā nirāśiṣaḥ D. naṣṭajñānā vicetasāḥ

128 P. kāmaṃ D. krodhaṃ

129 P. kāmāt krodham D. krodhāt kāmam

130 P. mānadarpād D. mānadarpāv

131 P. snehasambandhaḥ D. snehasambandhāt

132 P. sukhaduḥkhasamārambhāj D. sukhaduḥkhakriyārambhāj

133 P. janmājanmakṛtakṣaṇāḥ D. janmāj janmakṛtakṣaṇād (ajanma Deussen: Ungeburt(Tod))

134 P. puriṣamūtravikledaṣoṇitaprabhavāvilam D. puriṣamūtravikledaṃ ṣoṇitaprabhavāvilam

135 P. tasmād etā viśeṣeṇa naro 'tīyur vipaścitaḥ D. tasmād evāviśeṣeṇa naro 'tīyād viśeṣataḥ 「無視すべし atīyus」の主語が naro では数が一致しないが、他に適当な語がない。

せるのであるから。もろもろの感覚器官の常の姿は、ラジャスの中に隠されているのである。

- (10) 従って、子供は、渴愛を本性とする¹³⁶執着という精液から生まれるのである。(人は)自分の身体から生じ、自分の名前をもたない虫を手足から振り捨てるべきであるのと同様に、自分の名前をもっている自分から生まれたのではない¹³⁷子供という名の虫を捨てるべし。
- (11) 精液から、汗から¹³⁸、脂から¹³⁹、自然に (svabhāvāt) あるいは (前世の) 行為の結合によって、生き物は生まれるのである。知恵ある者はこれらに無関心であるべし。
- (12) ラジャスはタマスの中に投げ込まれ、サットヴァはタマスの中に休止している¹⁴⁰。無知 (=タマス) は¹⁴¹、理性と自我意識を特徴とする知の住まいである。
- (13) それ (無知) は、身体ある者 (が身体を得る時) の種子であり、それは個我と名づけられる種子である、と言われている。(その無知という種子は) 時間と結びついた行為によって、輪廻を回すものである¹⁴²。
- (14) これ (個我) は、夢の中ではマナスによってあたかも身体を持っているかのように楽しむように、行為を源とするグナ (性質) によって身体を持ち (dehī), 母胎の中でそれ (無知?) を得るのである¹⁴³。
- (15) (身体を得た者の) 感覚器官は、それぞれ、(再生の) 種子となった行為によってつき動かされ、執着を伴う意識によって、自我意識から生じるのである。
- (16) この自我が生じた者には、音声への執着によって耳が生じ、色への執着から眼が、香りへの熱望によって鼻が (生じるのである)。
- (17) 同様に、触感のために風が (生じる)¹⁴⁴。プラーナ、アパーナを存在場所とする風と、ヴィヤーナとウダーナ、そしてサマーナが五通りの仕方 (胎児の) 身体を維持するのである¹⁴⁵。
- (18) (前世の) 行為によって生じた、身体と心の苦を最初と最後そして中間にもつ肢体が成長すると、人は、ブラフマンに¹⁴⁶おおわれて生まれるのである。
- (19) 苦は、取得 (upādāna) によって生じるであろう。そして、うぬぼれによって増大するのである。この両者の棄却によって滅は生じるであろう。滅を知るものが解放されるのである。

136 P. tarṣātmakād D. tadātmakād

137 P. asvajāms D. asvakāms

138 rasataś N. rasataḥ svedarūpāt snehāt yūkādayaḥ

139 P. snehāj D. dehāj

140 P. sattvaṃ tamasi samsthitam D. sattvaṃ ca rajasi sthitam

141 P. ajñānaṃ D. avyaktam

142 P. -parivartakam D. -parivartanam

143 P. upapadyate D. upalabhyate

144 P. sparśanebhyas D. sparśane tvak D.の読みがわかりやすい。

145 P. dehayāpanā D. dehayapanam

146 P. brahmaṇā D. varṣmaṇā

- (20) もろもろの感覚器官の生成消滅の両者はラジャスにおいてのみ（起こるのである）。
（この両者を、）知恵ある者は、聖典を眼として、正しく観察して振る舞うべし。
- (21) 認識器官は、願望がなくなれば¹⁴⁷、感官の対象に近づくことはない。もろもろの原因が認識された時に¹⁴⁸、身体ある者（dehin）は再び身体を必要としないのである。

（1997年11月20日 受理）

147 atarṣulam N. tṣṣṇāhīnam Arjunamiśra : atarṣulam, rajastamorahitaṃ puruṣam

148 P. jñātaiś ca kāraṇair D. hīnaiś ca karaṇair D.の「感官が滅した時」のほうが文脈に即している。